

映画『ホビット』

トールキン研究者の「思いがけない冒険」

文学部英米文学専攻 教授

辺見葉子^{へんみ しょうこ}

2012年12月1日夕刻、六本木ヒルズのイベント広場は、ピーター・ジャクソン監督による映画『ホビット』三部作の第一弾、「思いがけない冒険」のジャパンプレミアに沸いていた。私もレッドカーペットなるものを歩いたのだが、これは原作の研究者としてこの映画の吹替版および字幕版の翻訳監修の仕事をしたためである。義塾英米文学専攻の学部ゼミ時代、私と同じくトールキンで卒論を書いた後輩2人（現在信州大学で教鞭を執る伊藤盡君^{いとう じん}と文学部の同僚である高橋勇君^{たかはし ゆう}）とトリオを組んでの仕事であった。トールキンから始まって、私は中英語ロマンスやケルト語神話へ、伊藤君は古英語や北欧の言語・文献学へ、高橋君はロマン派詩作品から現代ファンタジーまで、とそれぞれ研究領域を広げたが、3人合わせると、実はトールキンという巨人の守備範囲をちょうどカバーできるという案配なのである。

10年前、トールキン原作の『指輪物語』を同じくジャクソン監督が映画化した『ロード・オブ・ザ・リング』公開時には、字幕をめぐる「原作ファン」の不満が爆発して騒動となったため、今回映画配給を行ったワーナーはその二の舞を避けるべく、私たち3人を「翻訳監修者」として受け入れたわけである。では具体的に、私たちのした監修作業とはどのようなものだったのか？例えば、魔法使いのガンダルフがエルフ語のせりふを話すある場面。ここには“Age may have changed me”という英語字幕が付いていた。これを吹替版・字幕版の翻訳者は共に「わしも年老いまして」と訳した。確かに日本語としてはこの方がこなれているのだが、しかし「魔法使いは海のかなた西方の神々の国から、中つ国^{なか}に遣わされた精霊であり、中つ国では常に老人の肉体を纏っているものであって、人間と同じような意味で年老いることはない。したがってここは『わしも変わりました』とすべき」と指摘するなど、原作世界と齟齬^{そご}をきたさないよう目配りするのが私たちの主たる役目であった。

監修者3人にとっても、学部のゼミでトールキンをテーマに卒論を書いた頃には想像もしなかった「思いがけない冒険」であったが、『ホビット』の冒険の旅は、今年12月には第二部、来年7月には第三部へとまだ続く。

※古英語 (Old English)・中英語 (Middle English)・古英語は5世紀半ばから1100年頃までの英語、中英語はそれ以後の1500年頃までの英語



談話室

教員によるエッセイコーナー